

令和元年度 第1回豊田市生涯学習審議会 会議録

- 日時 令和元年7月26日(金) 午後1時30分～午後3時30分
 - 場所 市役所南庁舎5階 南52会議室
 - 出席者 [豊田市生涯学習審議会委員](敬称略)
小木曾祐子、加納勝彦、坂本耕二、杉山浩子、鈴木覚、鈴木啓郷、土井幸治
中田繁美、西原香保里、牧野篤、山村史子
 - 欠席者 湊裕
 - 事務局 生涯活躍部 田中茂樹、清水章
市民活躍支援課 濱田孝光、松井俊幸、宮川恭子、前田裕樹
-

次第

- 1 開会
- 2 新任委員紹介
- 3 会長あいさつ
- 4 議事
豊田市の高齢者の活躍支援について
- 5 生涯活躍部長あいさつ
- 6 閉会

■ 新任委員紹介 区長会推薦の鈴木啓郷委員を紹介

■ 議事 豊田市の高齢者の活躍支援について

【 委員意見 】 (要約)

○A 委員 国の動きとして、地域包括ケアから地域共生社会を目指しつつあり、地域の人材育成に力を入れていく方向性である。生活困窮者に対するの制度ではなく、生活困窮者になる前に住民が助け合える地域共生の社会づくりを目指している。自治体はサービスの提供ではなく、住民が実施することを支えていく存在にならなければいけない。

●事務局 資料の説明

○A 委員 地域共生社会を考えるうえで、高齢者の社会参加だけでなく、多世代交流が必要不可欠である。そのためには特に子どもとのつながりが重要である。豊田市には中学校区 28 の交流館があり、これは全国的に見て活発な活動と評価されている。さらに各館に 5、6 名の職員体制は他の市町村にはない充実体制である。6 月の社会教育法の改正により、社会教育施設（図書館、公民館等）を一般行政財産にして地域振興に活用できるようになり、法制度改正で柔軟に使えるようになってきた。地域学校共働本部により、学校の運営に携わる機会がある。学校が抱え込んでいる問題を先生と地域が連携することにより、解決し、生涯学び続けることのできる子どもを育てていく。

○B 委員 アンケートの回収率が 10%しかない。事業所としては高齢者の雇用に対して消極的ではないか。高齢者の就業を「意欲がない、暇つぶし」と捉えている事業所があるかもしれない。

●事務局 回答期間の短さ、返信用封筒をつけていない等の条件からではないか。返信いただいた事業所からは雇用したいというニーズがみられた。

○C 委員 従来の高齢者は、定年後、老人クラブや自治会で地域の活動をするという流れがほとんどであり、仕事や学びという選択肢はあまりなかった。人生 100 歳時代といわれる昨今、高齢者方の考え方も変わり、定年後のセカンドライフで別の仕事を希望する人が増えてきた。

また趣味や学びの選択肢も多様になった。75 歳超まで仕事や趣味、学びをすることにより、地域の担い手がいなくなったり、高齢者クラブの会員が減ったりしてきている。

- A 委員 親族でトヨタ系に勤めていた人がいる。定年後一斉に年金を受給し、生活し、亡くなっていた世代である。それが今では、平均寿命が男性：87 歳、女性 91 歳で、今の小学生の平均寿命は 107 歳といわれている。人生 100 歳時代に突入した今、年金を受給しながら社会貢献というモデルが崩れてきている。趣味や社会貢献によって、年金 + a の収入が得られる仕組みがあると、活躍の場としてうまくいきやすい。
- C 委員 アルバイトをしながらでも地域活動は苦にならないという高齢者の方もおられるが、一方経営者の意見は腰掛け的では困るという声もある。
- A 委員 経営者も少し前の発想であり、今の時代に対応できるよう柔軟になっていくことが求められる。シルバー人材センターなどの機関が働きかけ、経営者の意識を変えることにも何かするべき。
- D 委員 アンケートを見て、正直腹が立った。返信率が悪いことについてはもちろん、「暇つぶしで働いてもらっては困る」という意見が出ることに腹が立った。自分自身パートで働いているが、一緒に働いている同僚に「暇つぶし」で働いている人はいない。そもそも、今まで働いていた人々なので、「暇つぶし」でないことは誰よりも分かっている。そういう経営者の意識を変えるために行政が何かやるべきではないか。
 新たな取り組みを進めるのではなく、すでにある制度をつなげることは賛成だが、ハローワークやシルバー人材センターなど、既存の組織をどうつなげればいいのか不明である。仕組みをしっかり設計しないと、成り立たない。保育・子どもの分野で高齢者が活躍できることはないか。子どもの貧困や保育士の待遇の低さ、など社会的に問題になっている点に貢献できないか。具体的にどんなことができるかお手伝いしたいが、どんなことができるか個人では分からない。そこを分かりやすく、行政としてコーディネートすると効果的かもしれない。
- A 委員 既存の制度をコーディネートするには、やはり雇う側の意識変革が必要。
- E 委員 自身の経験として、ボランティアを促進する仕事をしてきた。当時から考えていることとして、行政は活動のメニューを広げることもメニューの紹介になってしまいがちである。「何かしたい」という活動のきっかけは「課題の発見」である。課題に気が付いた人が行動を起こす場、受け皿がないことが問題。既存メニューを増やすことも必要だが、「課題の発見」をどう把握するかを考えることが大切。5、6 人の交流館の職員がどんなことができるのか、まで考えるのが行政の役割。主体性を応援するのではなく、主体性のきっかけに着目することに意味がある。
- F 委員 高齢者は自分で学ぶ場を探しており、とよた市民福祉大学も選択肢の一つである。課題を発見後、どのように行動するかが大切というテーマにしている。それら

の活動事例を「見せる化」することで、「自分にもできる」という発想をもってもらえるようにすると、参加しやすい。人生 100 歳時代になり、自分自身を経営していき、人生を設計していくことが必要になる。1 週間 7 日間を仕事・余暇・ボランティアなどどう自分で切り分けるか、どうマネジメントしていくかを学ばなければいけない。

○A 委員 最近では終身雇用の時代ではなくなったという企業もある。豊田市はトヨタ系が多く、終身雇用が当たり前であったため、時代による変化があった際、その波（影響）が一気に来る。時代の波に乗れず、顕著に暮らしていけなくなる人が出てくる可能性がある。その時にどう暮らしていくか、どう 20 年、30 年生き抜いていくか考える必要がある。

○F 委員 昨年度の審議会では働くことについて、定年退職後、別の場で働くことで「こんなに働くことが楽しいんだ」と感じた人がいることを知った。緩やかな仕事のあり方があっていいと思う。

○G 委員 今年度から交流館で勤務している。地域の役や地域会議、わくわく事業などで様々な高齢者が活躍していると、日々感じている。地域の中での活動が縦割りとなっており、それぞれの動きを統括する場・情報を統括する機能がない。交流館はコーディネートの役割を担っているが、まだまだ地域の情報を取りにいけない。「交流館に聞けば頼りになる」というコーディネートを目指していかなければならない。交流館から地域の方に何か相談すると、すぐに対応してくれる。しかし、交流館からの依頼は、「ボランティア」というイメージが強くお金をもらうことに抵抗感がある人もいる。こうした依頼も地域のプチシルバー人材センターのようなイメージでプチ就労の選択肢として充実すれば、やりがいにもつながるのではないか。

○A 委員 交流館の話になったが、事務局が最近、先進事例として、長野県飯田市の公民館運営を見に行き、参考になったことはあるか。

●事務局 住民自治の学校として機能しており、建物は行政が設置し、公民館は地域が運営している。備品を買うことや多少の修繕は地域の人が行っている。運営に係るお金のほとんどが区費で賄われている。

○A 委員 歴史から読み解くと、元々裕福な地域であったが、世界恐慌により、貧しくなった。この経験したことで、国に頼らず、自分たちで考え、行動するという市民の基盤になっている。以前の飯田市長が人事制度により、行政職員が交流館に外向する制度にした。地域に張り付いているため、市と行政が対立しない構図になっている。住民から行政への提案型の自治区である。豊田市の交流館主事も口

ーディネート機能を持っているため、住民から「自分たちがするからやらせてほしい」という提案ができる環境になると地域は活性化し、活躍の場として広がる可能性がある。

○G 委員 昨年度、交流館のルール変更で、公益性につながる内容であれば、企業でも利用できるようになった。交流館の利用の機会を拡大しているといえる。

○F 委員 豊田市の交流館は栄えているイメージがある。稼働率はすでに高いのではないか。それが故に新規に利用しようとする人からしたら、利用予約が取りづらい等、ハードルが上がっていないか。

○G 委員 市内28の交流館があり、稼働率の高い日時、曜日がそれぞれの館である。平均すると、いっぱい利用できないという状況ではない。内容によっては利用調整で1か月以上前に予約できるようルールもあり、融通が利くようになっている。

○H 委員 区長会の代表として今回から参加させていただいている。自治区の役はこれまでも務めてきた。経験談として、福祉や教育の面で自治区が中心になり、地域でやってほしいと要望があるが、人手が足りていないのが現状である。副区長以下は兼務で務めているため、全員で集まって議論する機会は月に2、3日しかない。そのような環境だと区長の動き、方針が自治区の良し悪しに関わる。責任がある一方、自分がノウハウを作れば今後、良い形にできていると思っている。自分の地域では、介護をしながら仕事している家庭が多い。若い世代は交通の便がいいところとか便利なところに移動していってしまう。子どもの見守り活動をしているのは、家にいる元気高齢者だが、そもそも元気高齢者は家におらず、仕事をしている。仕事をしなくなり、家にいるようになる世代は体力がなく、見守りができない。結局人手不足の問題となってしまう。

○B 委員 現状、地域の活動など、参加している人は一部の人と思われる。経済的にも安定しており、昔から地域の活動に参加している人がほとんどのように思われる。場に出にくい人がいることを想定し、機会づくりをしていく案を考えていかなければいけない。年金+aの収入となる有償ボランティアはひとつ有効かと思う。ただ、子どもとの関わりに関して、放課後児童クラブで保護者とのトラブルになった事例も数多くある。子どもの成長過程で何を求めているかを理解する難しさによるものだと思う。シニアアカデミーでの講座で学び、そういった現場につなげることはできないか。

個人的な話だが、今年で再任用が終わる。その時に福祉総合相談課から学習支援のボランティア募集の案内をもらった。参加したいと思った。タイミングがとてもよかった。広報をする際に広報とよただけでなく、いつどこで広報するか、経験を生かせる場の情報をいかに提供できるかまで考えると効果的である。将来の活躍

の場の情報提供があると、「来年はこんなことできる」と考えてもらえる。

●事務局

大手企業の定年退職者の声として、現役時代、忙しくて活動したかったが、できなかったという意見があったと聞いている。シルバー人材センターとともに対象者への周知する活動行っているが、場の提供も必要だと考える。浄水小学校では、子どもの活動に高齢者が関わり、活躍の場となっている。多世代交流として、子どもと一緒に活動したいというニーズがあると感じている。

○B 委員

子どもと一緒に活動することは楽しいが、放課後児童クラブ等のように管理しているときのトラブルを心配し、ためらう人も多いのではないかと。

○I 委員

豊南交流館で図書ボランティアをして 17 年目になり、今年も中学生のボランティア受け入れに協力した。交流館のマッチングの一例と思っている。このように交流館の職員は成果もあげているが、毎年のように異動、担当業務変更があり、理解した時期に業務が変わってしまい、気の毒に思う。交流館職員のスキルアップをどんな形でしていくのか、人材確保、手立てを考えてほしい。

交流館にやってくる人たちは身近な人に声を掛けられてくる人が多いと感じる。シニア世代ではなく、その子ども世代をターゲットに活躍の場を周知できるよう考えることが大切ではないかと。

「何かやってみたい」と思ってから、行政の支援に気付くことが多い。磐田市では、コンビニに広報誌が置いてあった。豊田市でも広報とよたが置いてあるが、気持ちの変化を起こすきっかけとなる支援を行政ができるとうい。

○J 委員

セカンドライフチャートでは、様々な団体の名前が載っていた。交流館の修繕などシルバーが関わることができる場もある。自分が高齢者の立場だとして考えると、「次に何をしようか」となると思うので、定年後に仕事を探すのではなく、在職中に情報を提供できるとよい。シルバーの会員 2,000 人いるが、暇つぶしで働いている人は少ない。高齢者の雇用に関して、企業のイメージを変えていきたい。

○A 委員

高齢者に対するイメージが悪い。新しいイメージを持つ必要がある。

○K 委員

今日の審議会は様々な意見があり、様々なことを知ることができた。ボランティアの定義を変えないといけないと感じた。有償、無償という問題ではなく、安価な担い手になってはいけない。飯田市の事例紹介から、住民がそれだけ活躍しているのは、行政や社協がやりすぎないからだだと考える。主役は住民であることを再認識する必要がある。情報を届けることが行政、社協の役割だと考える。

○A 委員

第 8 次総合計画の生涯学習を実現するためのベースにあるのは、教育や学習である。パラレルキャリア・パラレルジョブズの時代であるため、多様な選択肢を

考え、高齢者の活躍支援を行っていかなければいけない。